

# フランス語の定冠詞の単数形 LE と複数形 LES における 数的相関性をめぐって

ブヨ・バティスト

## 0. 序論

伝統的に、フランス語の定冠詞の単数形 LE と複数形 LES との使い分けの基準として文法学者によってよく挙げられているのは、指示対象<sup>1)</sup>の数の意味上の問題である単数性(一つだけの対象)と複数性(二つ以上の対象)との数的対立である。しかし、文法における形式上の面においては、LES は LE の複数形であることは間違いないが、意味上の面においては、LES N は LE N の複数性を表すものとしては必ずしも用いられていないのではないだろうか。というのも、以下のような総称文(1)～(3)のあいだの比較から観察されるように、総称的意味をとる femme(女性)の指示対象のこの意味は、単数性あるいは複数性との数的対立とは無関係であるにも拘らず<sup>2)</sup>、形式上には定名詞句の単数形 la femme あるいは複数形 les femmes となってしまうのである。

(1) La femme est l'avenir de l'homme. (Aragon) 女性は男性の未来だ

(2) ??La femme est bavarde. 女性はおしゃべりだ

(3) Les femmes sont bavardes. 女性はおしゃべりだ

(1)と(3)における定名詞句 la femme も les femmes も「女性」の総称的意味を指し示していると考えるのであれば、定冠詞の単数形と複数形との上記のような選択によって指示対象の単数性と複数性が形式上区別されているように見えるのは一体何故だろうか。この疑問点から、本論文では、(1)と(3)における形式上の定冠詞の単数形／複数形の選択が意味上の数的区別である指示対象の単数性／複数性と相関しているのかどうかを検討する。

## 1. Leeman (2004) の論説

### 1.1. 定義的述語と出来事的述語との違いをめぐる定冠詞の単数形と複数形との選択

Leeman (2004) は、(1)と(3)における定冠詞の単数形か複数形かの選択を述語の違いの問題としている。というのも、(1)のときは être l'avenir de l'homme(男性の未来である)は定義的述語<sup>3)</sup>である。そして、その定義としては(男性の未来ではない女性というような)例外を許さない全体的一般化である上で、この定義的述語の主語となる名詞 femme の指示対象は「全ての女性」を指し示さなければならないのである。そこで、等質性を表すと思われる定冠詞の単数形を用いることになる。それに対して、(3)における être bavard(おしゃべりである)は出来事的

述語<sup>4)</sup>であることから、今回は(おしゃべりではない女性というような)例外を許す部分的一般化だと言える。従って、異質性を表すと思われる定冠詞の複数形を用いることになる、と考えられる。

## 1. 2. 総称の意味における違いをめぐる定冠詞の単数形と複数形とのs選択

そして、Leeman (2004) のこの説明に依拠するならば、(1) と (3) における定冠詞の単数形と複数形との選択は、*femme* の単数性 (一人の女性) あるいは複数性 (二人以上の女性) というような単複的対立ではなくむしろ *femme* の総称の意味における (全ての女性かほとんどの女性かというような) 違いの問題だと分かる。このように、例外を許さない定義的述語を用いた (1) の総称の意味は「すべての女性は男性の未来だ」という完全的な意味であり、ここにおける *femme* の指示対象は「全ての女性」を意味している。それに対して、例外を許す出来事的述語を用いた (3) における *femme* の指示対象は「全ての女性」について言うことができず、今回は「女性はおしゃべりだが、おしゃべりではない女性もいる」というようなより狭い部分的な意味となる。

言い換えれば、(1) と (3) との間における総称の意味の違いは、定冠詞の単数形の場合は、意味上には *femme* の意味クラス (全ての女性) が指し示されているが、定冠詞の複数形の場合、それは不可能である、という違いである。では、*femme* の意味クラス (全ての女性) が指し示されているのが定冠詞の単数形の場合のみであるのは、一体何故だろうか。

## 2. フランス語における定冠詞の意味

単数形か複数形かの選択による指示対象の総称の意味に見られるこの違いは、(1) と (3) のように定冠詞を用いた定名詞句に見られるものである。例えば不定冠詞の場合は、総称の意味を表すために不定名詞句の単数形のみを用いることができ、単数形と複数形との使い分けは生じない。

(4) Un triangle a trois côtés. (三角形は三つの角がある)

(5) \*Des triangles ont trois côtés. (三角形は三つの角がある)

このことから、(1) と (3) における単数形と複数形との選択を理解するには、まずフランス語における定冠詞の意味について見る必要があると考えられる。そのために、フランス語における定冠詞と指示限定詞の用法と意義を比較してみることにする。

### 2. 1. シニフィエとシニフィアンのズレと一致

定冠詞と指示限定詞をもって指示対象の時間と空間を限定できることは言語学上自明だといえる。

(6) Tu connais la fille là-bas ? (あそこにいる女性のことを知っている?)

(7) Tu connais cette fille là-bas ? (あそこにいるあの女性のことを知っている?)

とはいえ、(指示対象の外側から考えられる) 指示対象の空間時間的位置づけを問題とするダイクシス上のこの限定に、(指示対象の内側から考えられる) 指示対象に対する話し手の主観的見方を問題とする評価上の限定がさらに重なるような場合もある。そして、評価上のこの限定の場合、定冠詞と指示限定詞の二つのケースにおいて異なるのはシニフィアン<sup>5)</sup>とシニフィエ<sup>6)</sup>との相互関係である。

指示限定詞を用いた場合は、シニフィエとシニフィアンとの間にズレが生じてしまう。ここにおけるこのズレとは、シニフィエとなる概念は普段シニフィアンが表現する概念だと言えない概念だ、というケースである。例えば、以下の *cette idée* における *idée* (考え) は「考え」を意味するより、むしろ(シニフィアンから普段予想できる) プロトタイプの「考え」に属すると思われる意味素性を備えていない、すなわち「なんとも考えにくいような考え」を意味している。

(8) *Cette idée ! Non mais ça va pas la tête !* (なんという考えだ! 頭がおかしいでしょう!)

この例文においては、指示限定詞が用いられることによって *idée* の *idée* がここで指示している内容は悪い意味合いを帯びてしまい、シニフィアン(この *idée* という言葉「考え」の聴覚上のイメージ)の欠格(「考え」ではなくなる)が行われると言える。

指示限定詞のこのケースに対して、定冠詞を用いたときは、シニフィアンとシニフィエとの間にズレが生じず、むしろシニフィエはシニフィアンと一致しており、今回における「考え」はプロトタイプの「考え」、すなわち「考え」の意味素性を完全に備えた、「まさに考えらしい考え」である、ということである。

(9) *L'idée que tu as eue ! Elle est parfaite !* (なんて良い考え!)

## 2. 2. 指示対象の安定性あるいは不安定性をめぐる定冠詞と指示限定詞との選択

以上をまとめると、シニフィエとシニフィアンとの間にズレが生じているか一致しているかに応じて、指示限定詞あるいは定冠詞が用いられることになる。シニフィエとシニフィアンとの相互関係をめぐるこのような違いは一体何故生じるのだろうか。この問いに答えるために、次の例文を比較する。

(10) Nous, les Irlandais ! (われらアイルランド人!)

(11) ??Nous, ces Irlandais ! (われらアイルランド人!)

Irlandais (アイルランド人) を一人称 nous (われら) として用いることができるのは定冠詞の場合のみである。同じようなケースとして、以下の例文を比較してみると、指示対象が話し手であるときに用いられるのは定冠詞であるのに対して、それが他者であるときには用いられるのは指示限定詞であることがわかる。

(12) Ah le con ! (バカな俺!)

(13) Ah ce con ! (バカな彼!)

これらの例文において定冠詞と指示限定詞との使い分けに制限が見られる原因として、指示対象の意味上の安定性あるいはその不安定性を挙げることができる。ここにおける「指示対象の安定性／不安定性」とは前節で紹介してきたシニフィエとシニフィアンとの一致 (安定性) あるいはそのズレ (不安定性) のことである。このように、(10) においてはアイルランド人であるのは自分 (話し手) である。そして、自分のことについてズレている例とするのは難しいことから、ここに用いられるのは定名詞句 les Irlandais となる、と考えられる。(12) についても同じようなことが言える。また、前節の (9) における idée はプロトタイプ的な例であり、同じようにシニフィエとシニフィアンが安定していたとも言える。それに対して、前節の (8) における idée はプロトタイプ的な意味素性を備えていない、いわばより悪い例としてシニフィエとシニフィアンの間にズレが生じていた。その結果、シニフィエとシニフィアンとの相互関係をめぐって指示対象に不安定な位置づけが与えられ、その結果、指示限定詞を用いることになったと説明することができる。

指示対象のこのような安定性／不安定性は以下の例文においても明らかではないだろうか。話し手が指示対象のアイデンティティに対して疑いをもつとき、すなわちシニフィエとシニフィアンとの関連づけがまだされていないときに用いられるのは指示限定詞のみである。

(14) C'est qui cette fille ? (誰だ、この子?)

(15) ??C'est qui la fille ? (誰だ、この子?)

ここにおいて指示対象のアイデンティティは不安定であるが、指示対象のアイデンティティが明確であるときに用いられるのは指示限定詞ではなくむしろ定冠詞のみである。

(16) *Dehors le chien!* (犬は外へ!)

(17) ??*Dehors ce chien!* (犬は外へ!)

以上の例文から明らかなように、ここにおける指示限定詞と定冠詞との選択を決める条件は、指示対象が安定しているか安定していないかという意味上の違いである。指示対象の安定性／不安定性のこの説明はダイクシスの現場指示動作の不要／必要の問題においても有効であろう。例えば、*cette bouteille* における *bouteille* (瓶) の指示対象は安定していないことから、指示対象のことを明らかにするために話し手からの現場指示動作が必要である。それに対して、*la bouteille* のときは、指示対象が安定されているので、この現場指示動作は不要となる。

(18) *Passe-moi cette bouteille.* (動作必要) (その瓶ちょうだい)

(19) *Passe-moi la bouteille.* (動作不要) (瓶ちょうだい)

これまでフランス語における定冠詞の意味は、フランス語における定冠詞と指示限定詞を比較して、この選択をシニフィエとシニフィアンとの関連づけを問題とする指示対象の「安定性／不安定性」の問題とされてきた。そこではまた、定冠詞の単数形／複数形の使い分けもこの区別を通じて説明できるとされてきたのである。これに対して、これから明らかにするように、フランス語における定冠詞の扱いは指示対象の安定性の問題であるとはいことができるが、さらに以下に示すように、指示対象の安定化の戦略の違いが (1) と (3) における定冠詞の単数形／複数形の形式上の使い分けに繋がるのである。

### 3. 定冠詞の単数形と複数形による指示対象の安定化の戦略の違い

今節では、フランス語の総称文における定冠詞の単数形と複数形との使い分けは、指示対象の総称的意味の違い (全ての女性あるいはほとんどの女性) の問題であるより、むしろ総称的意味をとるものとしての指示対象の安定化の戦略に違いがあることを検討してみることにしたい。すなわち、(1) と (3) などにおいて、定冠詞の単数形を用いるのは概念上／カテゴリー上の対立による指示対象の安定化のときのみである一方、定冠詞の複数形を用いるのはプロトタイプの例の累加による指示対象の安定化の場合であるということである。

#### 3.1. Leeman (2004) への批判

序論で紹介した定義的述語 être l'avenir de l'homme (男性の未来である) を定義的述語 être l'avenir (将来である) と置き換えてみると、これも定義的述語であるにも拘らず、定冠詞の単数形を用いることは不可能になってしまい、むしろ用いられるのは定冠詞の複数形となる。

(1) La femme est l'avenir de l'homme. (女性は男性の未来だ)

(20) ??La femme est l'avenir. (女性は未来だ)

(21) Les femmes sont l'avenir. (女性は未来だ)

これは一体何故だろうか。Leeman (2004) の説明によれば、(1) において定冠詞の単数形が用いられるのは、等質性を前提とする定義的述語だからであった。しかし、ここにおける定冠詞の単数形の扱いの問題を定義的述語の問題とするのであれば、(21) における定義的述語 être l'avenir が定冠詞の単数形ではなく定冠詞の複数形と共起することは Leeman (2004) の説明と矛盾していることになろう。

その問いへの答えの出発点として、次のような観察をあげたい。以下の例文から明らかなように、主語になる名詞の後ろには比較／対立の意味の強い aussi (...も) をもって定名詞句を修飾してみると、定冠詞の単数形を用いることが可能となるのである。

(22) La femme aussi est l'avenir. (女性も未来だ)

このことから、(1) と (3) に見られる定冠詞の単数形と複数形との選択の原因を、述語から発生する総称性のタイプの違い(完全的一般化あるいは部分的一般化) によって説明することには限界があるのではないかと考えられる。

### 3. 2. 概念上の対立による安定化のストラテジー1 (定冠詞の単数形)

前述の観察におけるような事象が生じる原因は、むしろ主語になる定名詞句の指示対象の安定化の問題ではないかと考えられる。例えば、(1) と (20) との間における定冠詞の単数形の制限から、次のような問いを導き出すことができる。(1) のときに femme の意味が総称的意味として安定したものになっているのに対して、(20) のときにそれがなされていないのは一体何故だろうか。この問いへの答えとしては、(20) とは異なり、(1) においては femme (女性) の後ろに homme (男性) が来たことによって概念 femme と概念 homme との対立のような概念上の対立が行われるからだといえる。そして、このように概念相互の対立が見られる場合は定冠詞の単数形を用いることができる。既に述べたように、femme と対立している homme を抜いてみると、定

名詞句の単数形 *la femme* を用いることは不可能となってしまう、(21)のように定名詞句の複数形 *les femmes* を用いることしかできなくなる。

(1) *La femme est l'avenir de l'homme.* (女性は男性の未来だ)

(20) ??*La femme est l'avenir.* (女性は未来だ)

(21) *Les femmes sont l'avenir.* (女性は未来だ)

また、このような概念上の対立は、二つの異なった概念相互の対立でなければならないという条件もある。例えば、*la femme est notre avenir* (女性は我々の未来だ) にすると、*femme* と *notre* (我々の) というような対立となり、「我々」というグループの中に「女性」も含まれる可能性があることから、定名詞句の単数形 *la femme* は不可能となる。このような場合も、定名詞句の複数形 *les femmes* のみが可能である。

(23) ??*La femme est notre avenir.* (女性は我々の未来だ)

(24) *Les femmes sont notre avenir.* (女性は我々の未来だ)

総称文の場合、定冠詞の単数形を用いるためには、この概念上の限定を行うことが必要であることは、以下の例文でも明らかである。必ず総称性をもつ *homme* (人類) と異なり、*femme* (女性) の意味は必ずしも総称的ではないことから、前節で述べたように、定名詞句の単数形 *la femme* を総称的意味で安定化させるために、比較の意味の強い副詞として概念上の限定を行う *aussi* (...も) を付ける必要がある。

(25) *L'homme est mortel.* (人類は死ぬものだ)

(26) ??*La femme est mortelle.* (女性は死ぬものだ)

(27) *La femme aussi est mortelle.* (女性も死ぬものだ)

また、形容詞 *mortel* (死すべき) を、否定詞として必ず肯定／否定という対立性をもたらすその反対語 *immortelle* (不死の／死すべきではない) に言い換えると、単数形 *la femme* は可能となる。

(28) *La femme est immortelle.* (女性は不死のものだ)

同じように、以下の例においては、否定的な内容を意味する皮肉文、もしくは否定文をもって概念 rose (薔薇) を何らかの異なる概念との対立の中に置くと、名詞 rose (薔薇) を総称名詞として安定化させるために定冠詞の単数形 la rose を用いるのが適切となるのである。

(29) Ça sent la rose. (皮肉文) (薔薇の匂いどころか)

(30) Ça ne sent pas la rose. (否定文) (薔薇の匂いどころじゃない)

### 3. 3. カテゴリー上の限定による安定化戦略2 (定冠詞の単数形)

概念上の限定のケースと同じように、フランス語の総称文においては、カテゴリー上の対立も見られる。このような場合も用いられるのは定冠詞の単数形である。例えば以下の例文においては、定冠詞の単数形を用いるために概念 voiture (車) のカテゴリー smart (スマートブランド) を明確化しなければならない。

(31) ??La voiture se vend bien cette année. (今年は車がよく売れている)

(32) La smart se vend bien cette année. (今年は、スマートブランドがよく売れている)

同じように、概念 soldat (兵隊) のカテゴリー français (フランス人) を明確化しなければ、定冠詞の単数形 le soldat を用いることができない。

(33) ??Le soldat résiste à la fatigue. (兵隊は疲労に強い)

(34) Le soldat français résiste à la fatigue. (フランス人の兵隊は疲労に強い)

以下の例文においても概念 chat (猫) のカテゴリー siamois (シヤム猫) が必要である。定名詞句の複数形 les siamois にすると、このようなカテゴリー上の対立は不要となる。

(35) ??Le chat est distant. (猫は冷たいものだ)

(36) Les chats sont distants. (猫は冷たいものだ)

(37) Le siamois est distant. (シヤム猫は冷たいものだ)

そして、(35) において animal (動物) を入れると、「動物」という上位概念に属する下位概念の「猫以外の動物」と「猫」という概念の対立が生じ、定名詞句の単数形 le chat の使用が許されるようになる。



(38) *Le chat est un animal distant.* (猫は冷たい動物だ)

### 3. 4. プロトタイプ的な例の累加による安定化ストラテジー3 (定冠詞の複数形)

では、フランス語における総称文において定冠詞の単数形を用いるために以上のような概念上／カテゴリー上の対立が必要であるのは一体何故だろうか。その理由を考えるとすれば、単数形 *LE* と複数形 *LES* における数的相関性 (形式上の単数形／複数形と意味上の単数性／複数性との相関性) を挙げることができる。

定名詞句の複数形と異なり、基本的に定名詞句の単数形 *la femme* は「一人の女性」だけを意味している。従って、(単数性をもつ指示対象である)「この一人の女性」を (総称性をもつ指示対象である)「全ての女性」に変化させるために、すなわち通常は単数性をもつ *la femme* を総称的意味の指示対象として安定化させるために、*femme* (女性) を概念的に対立する関係の中に位置づける必要がある。これは、前節で見た概念上の対立による安定化のストラテジーであった。

(1) *La femme est l'avenir de l'homme.* (女性は男性の未来だ)

言い換えれば、(1) において概念上の対立が必要とされているのは、形式上の単数形と意味上の単数性との相関性の問題だと言える。これに対して、概念上の対立が行われないときには、*femme* の総称的意味を安定化させるために、定冠詞の複数形を用いることになる。

(3) *Les femmes sont bavardes.* (女性はおしゃべりだ)

このような場合においては、*femme* の総称的意味の安定化は概念上の対立ではなく、むしろ複数形の扱いによる意味上の累加 (複数性) にある、ということが言える。すなわち、(3) における「女性」の総称的意味は、「一人の女性の例」の累加として考えるべきで、単数形による総称的意味とは異なるということを理解しなければならない。

(39) *Les femmes sont bavardes, comme ma femme.* (妻みたいに女性はおしゃべりだ)

その結果として、Leeman (2004) の述べた通りに「女性はおしゃべりだが、おしゃべりではない女性もいる」のように、複数形の場合は「女性」の総称性が希薄になってしまうわけである。しかし、Leeman (2004) の説明に準ずるならば、出来事的述語の総称性が希薄であるがゆえに

定冠詞の複数形が用いられることになるが、実際はそうではなく、むしろ一人の例の累加として考えるべきである定冠詞の複数形だからこそ「女性」の総称性が希薄になる、ということであろう。

#### 4. 結論

本論文では、フランス語における定冠詞の意味として、フランス語における定冠詞と指示限定詞を比較し、この選択を「安定性／不安定性」の問題とし、そして、定冠詞の単数形／複数形の使い分けも「安定化のストラテジー」の問題を通じて説明できるとしてきた。最後に、フランス語における定冠詞の単数形 LE と複数形 LES における数的相関性を再検討することを通じて、フランス語における「単複」の概念を再定義する必要があることを示すことも部分的ながらできたのではないかと考えている。

#### 注

- 1) 指示対象（または指示物、指向対象）はレフェラン（réfèrent）のことである。
- 2) 総称文の主語となる定名詞句 LE N / LES N の指示対象は単数性と複数性と無関係である N の意味クラスを指し示していると考えられる（Kleiber & Lazzaro, 1987 : 98-99）。
- 3) 定義的述語とは、定義的解釈をとることができる非出来事的述語（*prédicat nomique*）のことである。
- 4) Kleiber (1981) は、特定の解釈をとることができる *bavarder* などのように一時的状態を表す特定の述語（*prédicat spécifiant*）を出来事的述語（*prédicat événementiel*）と呼ぶ。
- 5) シニフィエとは、名詞の記号内容／概念（*concept*）のことである。
- 6) シニフィアンとは、名詞の記号表現／聴覚映像（*image acoustique*）のことである。

#### 参考文献

- Corblin, F. (1995), *Les formes de reprise dans le discours – anaphore et chaîne de référence*, Presses Universitaires de Rennes.
- Kleiber, G. (1981), « Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes », *Le français moderne*, Vol. 49, pp. 216-233.
- Kleiber, G. (1989), « Référence, texte et embrayeurs », *Semen*, Vol. 4, pp. 13-50.
- Kleiber, G. & Lazzaro, H. (1987), « Qu'est-ce qu'un SN générique ?, ou Les carottes qui poussent ici sont plus grosses que les autres », *Rencontres avec la généricité*, Paris, Klincksieck, pp. 73-111.
- Leeman, D. (2004), *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Coll. Linguistique nouvelle, PUF.